

ニジェール支所便り

2019年10月号

【編集長】小畑支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

★ニジェール支所便りが JICA ニジェール支所の HP でも閲覧できるようになりました！懐かしのバックナンバーにもここからアクセスできます!! ⇒ <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/index.html>

今月のトピック



- 新・支所長のつぶやき ～OMG！！～
- 9月の支所の活動紹介
- 新コーナー:ニジェール隊員 OVからの便り
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
～みんなの学校:住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ2～
～PASVA:農業普及システム改善プロジェクト～
- ニジェールにおける活動紹介
～ニジェールでゴミを集める日本人 第22話 -ニアメ市の急速な都市開発と市民生活～
- 巻末連載企画！ODのいちおし

新・支所長のつぶやき ～OMG！！～

その夜、確かに私は大きな敵と闘っていた。
追い込まれてもう負けそうというとき、最後の力を振り絞ったら、落ちた。
電気をつけてみたら腕に擦り傷が！ かなり痛い。
そんなことが2回あった。笑いごとではないのだが、
事務所で佐々木さんに話したら、ぜひ支所便り書いてくれという。
何と闘っていたのかはさっぱり思い出せない。
暑くて寝苦しいものもあるが、ニアメに幽閉されている閉塞感が原因かと思ったりもする。



運動不足を解消すればよく眠れるかと思い自転車を買ってテニスも始めた。
「パトロン、今日も決まってますね！」「だろ」。
拙宅のガルディアンに言われたので写真を撮ったら、レンズに指がかかっているではないか！
大使館通りを大統領府まで時速 30km を目指し漕ぐ。ニーハオと声を掛けられることもある。



テニスはアメリカンスクールのレクリエーションセンターに登録した。
コーチのムサ 51歳の口からは次々に日本人の名前が出てくる。かつてここでは JICA ボランティア達が集いよく大会も行ったとのこと。
そんな日が早く戻ってきてほしいと思う。



ダウンザラインが決まったら日本語で「やったー！」と言われた。

9月の支所の活動紹介

【帰国研修員クリバリーさんが見たジャポン！】

8月1日～30日にかけて横浜センターで実施された、「アフリカ諸国における持続可能な廃棄物管理」にニジェールから参加した環境省ニアメ州局長のマハマン・クリバリー・アダムさん（以下、クリバリーさん）が、9月6日に支所を訪れ、研修での日々を大いに語ってくれました！

ところで、クリバリーさんと言えば、普段は迷彩服のユニフォームに身を包み、ベレー帽を頭にビシッと決めているので、ラフなワイシャツ姿で登場した際は、一瞬誰かと思ってしまいました。

さて、まずはいつものように、日本の印象から...

クリバリーさん：とにかく清潔！特にトイレは素晴らしかった!!ニジェールだと、首都であっても清潔なトイレを見つけるのに苦労するので、できるだけ水分を取らないようにしているけれど、日本ならどこへ行ってもその心配がない。さらに驚きなのがウォッシュレット* お陰でTOTOという社名がすっかり頭に刷り込まれました。これって人の名前ですか？（アフリカ人に人気のアニメの主人公がTOTOという名前であるため。ここからTOTOの話でしばらくハマさんと盛り上がる）。もし可能なら、自分の家にTOTOのウォッシュレットを設置したい！そして、どのトイレにも、これまた綺麗な手洗いスペースがあり、手洗いの啓発すら困難を極めるニアメの状況とは雲泥の差だと思いました。

さすが、綺麗な街ニアメ(Niamey Nyala)を地で行くクリバリーさん、目の付け所が違いますねえ。それでは日本人についての印象はどうでしょう？

クリバリーさん：皆さん謙虚で、親切で、私たち外国人に敬意を払ってくれました。子どもたちもとても人懐こくて、可愛かったです。

それでは研修の話聞かせてください。

クリバリーさん：研修には12名が参加し、皆英語圏で私だけが仏語圏からの参加でした。そのため最初は言語で苦労しましたが、皆が助けてくれましたし、ナイジェリアからの参加者もいたので時にはハウサ語で通訳してもらいました(笑)今でもWhatsappで皆と繋がっています。この研修で感じたことは、すべての国で廃棄物処理について同じような課題を抱えているということです。研修中に作成した私のアクションプランは、地域住民の啓発活動をメインにしています。お金はかかりませんが、時間はかかる。人々のメンタリティを変えるのはそう簡単なことではありません。他国の研修員も、私の影響からか、啓発活動の重要性を意識するようになったと思います。



研修中の出来事を熱く語るクリバリーさん



持ち前のユーモアのセンスで、講師の方々を笑いの渦に！



クリバリーさんからの土産（速乾Tシャツと手動でもいける懐中電灯。参考にさせていただきます！）



TICAD7のサイドイベント（ACCP）でニジェールの清掃キャンペーンについて登壇したクリバリーさん



時を同じくして、横浜でTICAD7がありましたね。クリバリーさんもそのサイドイベントの一つ（ACCP¹）にプレゼンターとして参加されましたが、そちらの方はどうでしたか？

クリバリーさん：JICA ニジェールとの共催で実施したニアメの清掃キャンペーンについて発表しました。幸い発表は仏語でできたので、伝えたいことがきちんと伝えられたと思います。発表に最後に、廃棄物を用いた絵画を紹介しました。ニアメの若いアーティストが作成したものです。ここでも人々への啓発活動の重要性について発信することができたと思います。

今年度の清掃キャンペーンでは、大いにこの研修の成果を発揮してくだ

¹ アフリカのきれいな街プラットフォーム（African Clean Cities Platform）は、アフリカの国々がきれいな街と健康な暮らしを実現することを目指して、廃棄物管理に関する知見の共有とSDGsを促進するためのプラットフォームです。環境省、国際協力機構（JICA）、国連環境計画（UNEP）、国連人間居住計画（UN-Habitat）及び横浜市のイニシアチブで2017年4月に設立され、アフリカ35カ国、64都市が参加しています。

さい！

【ABE イニシアチブ第 6 バッチ生壮行会】

ABE イニシアチブ第 6 バッチで見事日本行き切符を掴んだ YAHAYA DAN GAGE Aboubacar さん（以下、アブバカルさん）の壮行会をささやかながら支所にて行いました。この壮行会には、先月帰国したばかりの ABE イニ第 3 バッチ生のタヒルさんと、昨年末に帰国した同じく第 3 バッチ生のディアウガさんも駆けつけてくれました。アブバカルさんは、タヒルさんと同じ琉球大学で研究生として半年、その後正規の修士学生として 2 年沖縄で過ごす予定です。アブバカルさんは、昨年の第 5 バッチで最終面接まで上り詰めたものの、惜しくも指導教官とのミスマッチで不合格。この悔しさをバネに、今年度も再挑戦してくれました。私たち支所一同、喜びもひとしおです。



小畑支所長から日本-ニジェール友好バッチをつけてもらうアブバカルさん

壮行会の冒頭、小畑支所長から祝福と激励の言葉が述べられ、その後、昨年から今日にいたるまで、アブバカルさんのサポートをしてきたハマさんからも、お祝いの言葉が送られました。アブバカルさんは終始笑顔で、それぞれの言葉に耳を傾け、喜びに胸を膨らませていました。

また約 3 年ぶりに祖国に戻ったタヒルさんとの再会も感慨深いものがありました。タヒルさんの汗と涙の結晶ともいえる修士論文²には、国の電力の 8 割近くを隣国ナイジェリアに依存する不安定な現状を、太陽光、風力といった代替エネルギーの活用によって改善したいという思いが強くにじみ出ていました。最後にタヒルさんが ABE イニシアチブというプログラムに深い感謝の意を述べると同時に、帰国後のサポートやネットワーキング構築なども充実して欲しいという要望をあげてくれました。日本とニジェールの懸け橋となる貴重な人材を、JICA としてどのように今後活かしていくか、大きな宿題を突きつけられた形となりましたが、タヒルさんの意見を真摯に受け止め、よりよい支援、連携の在り方を模索していきたいと思えます。

来年度(2020 年度)からは、これまでの ABE イニシアチブに加え、SDGs グローバルリーダー、食料安全保障のための農学ネットワーク(Agri-Net)、アフリカのきれいな街のための中核人材育成と、新たに 3 つのコースが加わり、修士や博士課程への留学制度を活用した人材育成事業がさらに多様化していきます。それぞれのコースの目的に合った優秀な人材を日本へ送れるよう、支所員一丸となって鋭意リクルート活動に励んで参ります！



8 月末に帰国したばかりのタヒルさんも修士証書と修士論文を携えて駆けつけてくれました。



生姜ジュースで乾杯！



2 名の ABE イニ OB と共に笑顔のアブバカルさん

(企画調査員 佐々木タ子)

² 修士論文のタイトルは、“Generation Planning for Thermal Units Integrated with Renewable Energy Source and Energy Storage Systems Using Two Different Optimization Technique”(2019) です。

新コーナー ㊧ ニジェル隊員 OV からの便り ㊧

先月号から始まったばかりのこのコーナーですが... 待てど暮らせど原稿が届かない日々が続いておりました。『これはもう、自分が書くしかないか(涙)』と諦めモードになっていた矢先、届きました！一本のメールが(ありがたや〜) ✨ 記念すべく初回に投稿(というか、このコーナーを作るきっかけとなった)して下さった、日達隊員の旦那さま、内田匠隊員(20-4 次隊)から、可愛いお子さんの写真と共に、これまた嬉しいお知らせです！

はじめまして

20-4(ガヤ・村落)の内田匠です

支所便りに隊員のスペースが出来たとの事を知り、場所をお借り、宣伝をさせていただきます。

隊員機関紙であったサブカラヤを発刊したいと考えています。公式版ではなく、あくまでフリーペーパーとして記事を募集します。

ニジェルにまつわる事はもちろん、今やっている事、趣味の事、宣伝、なんでも内容は大丈夫です。web 版のみの発刊ですので、文章の量もいくらでも、絵や写真も歓迎です。年内に発行できればと考えています。興味のある方はご連絡ください。

サブカラヤというのは、良い旅をという意味ですね。皆さんが見て、感じ、考え、行い、生きる、その人生という旅が時間や空間を超えてシェアできたら、なにか面白くなりそうです。SNS などもあり、個々の発信が可能な時代ですが、映えは気にせず、もっとごった煮をイメージしています。自由な記事の投稿ご協力をお願いします。

連絡・投稿先 sabukalafiya@gmail.com



★このコーナーでは、ニジェル OV の皆さんのお便りをお待ちしております！赴任当時の思い出や、エピソードなど写真と共にお寄せください！「かつてのカウンターパートは今どこで何をしてるんだろう？」といった疑問にも、できる範囲でお答えいたします(インシャアッラー)。さらに(!)ご投稿いただいた方にはもちろんニジェル・日本友好バッジをプレゼントいたします!!(郵送方法などは追ってご相談させていただきます)

JICA ニジェル特注、友好バッジ ✨



プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■ ■ みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2 ■ ■ ■

『みんなの学校：住民参加による教育開発プロジェクトフェーズ 2』では、初等教育分野と中等教育分野、二つの分野にて活動しています。初等教育分野においては、住民支援の校外学習に効果的なツールを導入することですべての児童の“読み書き”と“計算”の基礎学力改善を目指す『質のミニマムパッケージ』の開発と普及に取り組み、中等教育分野においては、アクセス、格差解消、教育の質の改善など、様々な教育開発課題の改善に貢献する“機能する”学校運営委員会 (COGES)モデルの全国普及を進めています。

「中等教育分野」では、2018/2019 学年度の『中等 COGES/COGES 連合の経験共有セミナー』を行いました。このセミナーは、今年度、全国中等 COGES/COGES 連合が年間を通して実施した活動結果を中央・地方関係者と共有・評価するとともに、現場活動にて見受けられた問題の抽出と解決策の検討を行い、来年度の発展方向性を協議することを目的としています。今回のセミナーで結果を共有したのは、プロジェクトが現在介入している 4 州のみですが、この 4 州においては COGES、COGES 連合共に、高く評価できる結果を得ました。まず、4 州内に現存する約 1000 校の中学校中 9 割程度の COGES の年間総括表が回収され、中等 COGES 当たりおよそ 9.6 活動が実施され、それぞれ 87 万フランセーファー(約 17 万円)の資金動員が行われたことが確認されました。これは 4 州約 900 校全体でおよそ 7 億 80 万フランセーファー(約 1 億 5600 万円)に上ります。初等教育における住民動員額は全体で毎年約 5 億円～6 億円であるため、それと合わせると、ニジェールの教育開発への学校運営委員会を通じた住民の貢献は全国で少なくとも 8 億～9 億円には上るでしょう。これらの動員の用途は、学校施設・インフラ整備、教材・文房具の購入、授業等で使用する演習問題の複写、定期テストの実施運営費など多岐にわたりますが、プロジェクトでは、質の改善にかかる活動を促進していることから、対象 4 州では、8 割～9 割の学校が COGES 支援の補習活動を実施し、主要科目の数学やフランス語においては、各教科あたり 60 時間の補習が行われたことが報告されています。この補習に関しては、授業についていけないことを理由とした落第・退学率が非常に高い中学校にとって、不可欠な活動といえ、現場の先生や生徒からもその効果が評価されています。

一方の中等 COGES 連合活動に関しては、新しい試みのため、資金動員や活動成果の問題を抱える中、まだまだ試行錯誤を繰り返しつつ進んでいる感じではありますが、95%以上の中等 COGES が連合に加盟しており、連合総会の参加率は平均 9 割に上るなど、現場関係者の期待は非常に高いです。4 州内に 37 ある中等 COGES 連合ですが、教育の質への貢献のため、連合と教育行政とが協力しつつ、州や県での統一学力テストをオーガナイズしたり、管轄内の全校に対する教員指導の強化支援をおこなったりと、少しずつ、その存在感を増してきています。

なお、このような高いパフォーマンスがセミナーにて報告された結果、プロジェクト開発の「機能する中等 COGES」および「中等 COGES 連合」モデルの有効性が高く評価され、来学年度にプロジェクトが介入を予定している新規 2 州の関係者意識が高まったと共に、プロジェクト開発の「中等 COGES 連合モデル」が国家モデルとして承認され、今後全国普及へと進められることになりました。

今後もプロジェクトでは、初等・中等の「機能する」学校運営委員会体制を強化し、住民参加を通じたニジェールの教育開発に貢献していきます。

(EPT 専門家 影山晃子)



中等 COGES 支援補習活動実施の様子

■■ PASVA: 農業普及システム改善プロジェクト ■■■

9月24日に雨が降ったのを最後に急に暑くなりました。2019年の雨季が終わったと思われるニアメです。プロジェクトでは10月から本格的に開始される、乾季野菜作を前に SHEP に関する活動を開始しています。

今は準備段階として、グループ化、グループへの SHEP とは何かを説明する啓発活動、現在の営農状況を把握するための参加型ベースライン調査を行っています。C/P が熱心に議論して作り上げた質問票をもとに、丁寧にザルマ語に訳しながら、作業は進みます。



小グループのメンバーの紹介をするグループ代表



毎週欠かさず参加している移動カフェ

現場での活動は毎週1回農民が集まり行う事になっており、2回あれば対象グループ(30名前後)の調査は終わるかなと予想しておりましたが、普及員の身内の不幸、村でお葬式があるなど予想外(想定内?)の出来事もあり、ニジュールらしく、ぼちぼち進捗しています。



マンゴーの木陰にて SHEP 活動の説明をするコミュニン 4 の普及員(右端)



活動終了後、普及員(左)に対してアドバイスを MT 候補(右)

プロジェクトの現場で実際に SHEP の活動を行うのは農業省の普及員です。プロジェクトでは普及員の指導、管理を行う管理職や本省の普及を担う部署である普及技術移転局の職員から5名を選定し、現在将来マスタートレーナー候補としての指導も開始しています。

マスタートレーナーは普及員の活動する現場を訪問し、普及員の活動に寄り添い、見守りながら、適宜、アドバイスや指導を行います。まだ、基礎を固める段階の地味な作業ですが、C/P と共に試行錯誤しながら、活動を継続していきます。

9月半ばには、支所の方の視察もありましたが、マイペースを変えることなく活動は続いています。

【PASVA 専門家 長井宏治】

支所便り7月号(2016)から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一准教授の～ニジェールでゴミを集める日本人～シリーズ第22話。今回は、急ピッチで進むニアメの街の開発と市民生活について執筆頂きました。

ニジェールでは雨季も終盤となり、ニアメ市内では木々が茂り、緑がとても濃く映ります。9月13日付けのニュースでは、ニジェール国内では豪雨により57人が死亡、1万2000軒の家屋に倒壊もしくは浸水被害が出ており、13万人に影響がでているという報道があります。ニジェール川の水位上昇によるニアメ市内の被害だけでなく、マラディやザンデルでの豪雨被害も深刻で、2000ヘクタールの畑に被害が出ているといわれています。

いっぽう、わたしの調査地のひとつ、ニアメ市内の北縁にあるコンゴ・ラバ村では、雨季の降雨が少なく、播種時期以降にサバクバッタの襲来を受け、トウジンビエとササゲの収量が激減しています。小雨により、トウジンビエの発芽が少なく、5回、6回とトウジンビエの播種を繰り返したと言います。村びとたちは、小雨による収量低下は「アッラーの思し召し」と言いますが、サバクバッタは農耕民にとっても、牧畜民にとっても敵だと言います。追い払っても、追い払っても、サバクバッタはターゲットにした植物に戻ってきます。サヘル地域では豪雨と干ばつの被害は局所的に、モザイク状に発生します。



サバクバッタに葉を食べられた *Acacia laeta* の木。われわれの都市ゴミによる緑化プロジェクトも、厳しい干ばつとサバクバッタの被害を避けることができない。



サバクバッタ。決まった植物をターゲットにし、群れで葉を食べ、食べ尽くすと次の植物に移動する。

先月号の支所便りのように、ニアメの国際空港が新しく整備され、飛行機からボーディング・ブリッジで降りることができました。ボーディング・ブリッジを通ると、世界各地で営業を展開する高級ホテル・チェーンのきれいな広告が目に入ります。ネット上で価格を調べましたが、大学の研究者がとても宿泊できるような価格にはありません。ターミナルを出ると、なじみ深い、古いターミナルにも大幅な改修の手が入り、空港が刷新されています。

空港からは片道3車線で、市内に入ると、国道1号線は4月15日大通り (Boulevard du 15 Avril) と名称を変えます。その道路は片道2車線の主軸道路に、その右側と左側の両側面に、それぞれ対面通行の2車線の道路があり、合計8車線の道路となります。主軸道路を走っているとスムーズに走ることはできますが、これまでのように曲がりたところで右折も左折もできず、直進しかできません。主軸道路の通行量は少なく、乗用車やバイクが高速で走る一方、側面の対面通行では通行量が多く、タクシーが道路脇に止まるため、渋滞が起こっています。

主軸道路と側道の走行車は、主要道路との円形交差点（ロン・ポワン）で曲がったり、側道に入ったり、そのまま直進する必要があり、交通集中で渋滞がひどくなったようにも思います。この道路はプラトー地区から大統領領が空港へ行くのにはスムーズになり、保安・警備がしやすい道路になったのでしょうか。この道路網の整備により、ラクダやロバを使った運搬人、手押し車の行商人やゴミ収集車などは、この幹線道路を容易に横断することはできず、これまでの人々の動きにも変化が生じているはずです。



ニアメ市内の 8 車線道路—片道 2 車線の主軸道路の左右に対面 2 車線が併走している。



ニアメ市内の新しい企業ビルやホテル

この道路網の整備は、2017 年 6 月の支所便りで紹介したニアメ・ニャラ・プログラムの一環で進められています。ニャラというのはトレンドィーという意味で、流行の最先端都市への変貌を目的としています。市内の主要幹線の整備、空港の新しいターミナルや滑走路の建設、ホテルやショッピング・モール、大企業の本社ビル、ビジネスセンターの建設も進んでいます。また、新空港ターミナルの開設、拡張された道路の開通、高級ホテルの開業ラッシュも起き、めまぐるしい変化が生じています。

ドッソではソガ・プログラム、マラディではコリア・プログラム、タウアではソコラ・プログラム、ザンデルではサブワ・プログラム、ドゴンドッチではハスケ・プログラムと呼ばれ、各都市で再開発計画が進んでいます。これらの名称は現地語で「新しい」「化粧」「きれい」という意味をもっています。このような都市開発の急速な進行は外国資本の導入をひとつの主目的として進められ、地価の高騰や土地利用の変化、人々の生活にも変化を引き起こしています。建設ラッシュにより住民や商人が追い出されたり、賃貸料の引き上げにより生活が圧迫され、引っ越しを余儀なくされている人も多くいます。

わたしは買い出しのために、いつものように、なじみの商人たちを探し求めました。この商人については 2017 年 1 月号の支所便りで紹介しましたが、もともと市内の中心部にあったプチ・マルシェで営業をしていました。2012 年にプチ・マルシェの失火などもあり、市当局に立ち退きを迫られ、近隣での仮店舗での営業を続けたのち、昨年 2018 年に、市内から 6km ほど離れたラザレ(Lazaret)地区へ移転しました。この地区は、1970 年代の干ばつで多数の家畜を失ったトゥアレグの人々の避難キャンプがあった場所であり、援助の中心地でした。いまでは巨大なゴミ捨て場となっており、大量のゴミが放置され、着実に上乘せされています。

商人たちは、ニアメ市によりこのゴミ捨て場へ移転するよう指導され、みずからの力でゴミを撤去し、きれいな砂を入れ、商店を建設しました。これは、顧客を呼び込むための商人たちによる自助努力だと考えられます。わたしが緑化のためにニアメ市内のゴミを運んでいるのとは反対に、商人たちは清潔な市場をつくるために涸れ川や砂漠化した土地の砂を入れているのです。ニアメ庶民のあいだでは、この市場はマルシェ・ドーレと呼ばれます。ドーレとはハウサ語で「義務」を意味し、商人たちが移動しなければならなかったこと、そして、庶民は生活のために食品を購入しなければならないことを掛けています。



ラザレ地区の巨大なゴミ捨て場—売れ残ったのだろうか、大量のオレンジが廃棄されていた。



ラザレ地区のゴミ捨て場に建設された「マルシェ・ドーレ」（写真奥）。商人たちはここへの移動を強制された。

市内で商人は資本や財産を持っていると思われがちですが、零細な個人商店主の資金力には限りがあります。ニアメ市から補助金が支出されるはずもなく、ゴミの撤去と商店の新規建設、商品の引っ越しにも多額の資金が必要となりました。市内から 6km も離れた市場に客—とくに日々の食料を購入する女性たちが集まることはなく、顧客離れが進んでいます。かつて、はぶりのよかった、なじみの商店にはトマトとタマネギしか置かれておらず、商人の顔からもすっかり生気が失われたように思いました。わたしは詳細を聞く気にもなれず、いつものように必要品を注文し、その商人は近隣の商店から商品を取り寄せ、持ってきました。その姿を見て、人間は変化に機敏に対応し、生き方を大きく変えることはできないのだと感じざるを得ませんでした。



なじみの商人、アルハッジ。商店の軒先を借り、トマトとたまねぎを売っていた。人の往来もまばらである。

アフリカで急速に進む都市開発が、政治主導によってニジェールにもやってきました。この都市開発の開始は他国に比べると遅すぎたのかもしれませんが。しかし、ニアメ市をはじめ各都市における急速な変化、都市の開発はだれのためのものなのでしょう。2019年8月末に開催された TICAD7 では、アフリカをビジネスパートナーとすることが打ち出され、政府関係者や研究者、NGO、そして民間企業なども加わって、多数のサイドイベントも盛大に開催されました。ニジェールからはイスフ大統領も参加しました。TICAD7 の趣旨はアフリカの高い経済成長率と将来の有望な市場という時代の流れにのったものだろうと思います。

日本国内のビジネス界では、アフリカ投資に乗り遅れてはいけないという機運も出てきました。しかし、一方で、外国人にとって便利で、外資系企業がビジネスを展開しようとする投資環境やインフラの整備がニジェール国内の一般市民の生活にどのような影響を与えていくのか、人々の生活が貧困や飢餓、自然災害、テロリズムと隣り合わせの状態であるだけに、われわれは注視し、敏感である必要があることを強調しておきたいとします。

ここ最近のニアメの街の変化を目の当たりにして、私も同様に、違和感にも似た複雑な感情を抱きました。ニアメに住む者、とりわけ我々外国人にとって、このめまぐるしい発展は確かに喜ばしくもあります。ただ、近代的でおしゃれな建物が林立する一角からちょっと裏手に入れば、未舗装の道路や掘っ立て小屋のような小売店、所狭しとせめぎ合う日干し煉瓦の家屋群が相変わらず軒を連ねており、そこだけ時間が止まってしまったような空間が広がっています。こうした地域で暮らす大多数の国民は、すっかりこの「発展」という蚊帳の外に置かれている、そんな印象を受けずにはられません。このあまりにもかけ離れた二つの景色が奇妙に混在するニアメで、人々は一体何を想い、この変化をどのように捉えているのでしょうか？(Y.S.)



巻末連載企画！ **OD**のいちおし

我が家の前を通って毎日コーラン学校に通う女の子たちをいつもほほえましく見ていたのですが、ある日思い切ってすれ違う時に「写真撮ってもいい？」と聞いてみました。でも笑っているだけでOUIともNONとも言いません。視線はこちらに向いてるし、笑っているからいいのよね、とパシャリ。

うれしいのか、恥ずかしいのか、写っているのに顔を隠したり、半分陰に隠れていたり、はにかむような笑顔がとってもかわいい。ふと気づいたら一人いない。完全に後ろに隠れてしまった子もいたようです。

ニアメの女性たちはおとなしくて、かわいらしくて、つつましい、ですが、芯が強くてしたたかな一面もあつたりします。この子たちはどんな女性になるのでしょうか。



(企画調査員 大出理恵)